

ANNUS HORRIBILIS!

高原 孝生
(PRIME 所長)

かつてエリザベス二世は、王室不祥事がつづいた1992年をふり返って、「ANNUS HORRIBILIS! おそろべき年だった!」と慨嘆した。平和を守り、実現していく観点から、2014年は、まさにそれであったように思われる。

あらためて列挙するまでもない。洪水、嵐、大寒波など気候大変動の兆し、国境を越えた環境汚染の広がり、エボラ出血熱のような感染症の脅威。これらには戦争を前提とした軍事的安全保障の手段では対処できず、国際協力が不可避となる。併行して、ガザへの空襲、シリア内戦の悪化、西アジア地域やアフリカにおける暴力支配地域の拡大、欧州先進諸国でのテロリズム横行と、暴力行使の敷居が低まる傾向に拍車がかかっている。

日本の国内では、法治国家の基盤を掘り崩すような政治の暴走が進む。現行憲法の下で集団的自衛権行使を容認するという、かつてなら考えられなかったような閣議決定。武器輸出の原則禁止の撤廃。特定秘密保護法の施行。学校教育法や労働者派遣法の改正。そして沖縄、名護市長選挙、市議会選挙、県知事選挙、衆院選、と2014年に立て続けに示された民意を顧みぬ辺野古の新基地建設強行。大震災の復興の立ち遅れを横目になされる巨大公共投資。重大事故の検証も進まぬまま、ま

さになし崩し的に進められようとしている原発再稼働。文民統制、自衛隊海外派遣への歯止めも危うくなっている。どれも一つ一つ丁寧に議論されなくてはならないことばかりである。批判すべき点は多いものの、戦後の日本人が苦勞して曲がりなりにも築き上げてきた「戦争をしない国」が、がらがらと壊されていく感がある。

他方で希望が見えないわけではない。人間らしい共生社会を希求する人々の対抗的な活動が粘り強く続けられ、新しく生まれてもいる。武器を持たぬ市民の力は、理性と人間的感情による連帯である。孫主任を中心に編集された今号の二つのテーマが志向するところもそれである。

昨秋惜しくも逝去された坂本義和先生は、厳しく学問性を追い求められると共に、いのちを守るための「たたかい」という平和研究の主体的な側面を、つとに強調された。そして日本の若者が世界、なかんづくアジアの若者と、積極的に知的な交流をおこなうことを願い、そのためのネットワーク作りを促してこられた。敗戦70年を迎え、諸先達の志を継いで、大学の研究所がいま果たすべき役割を模索していきたい。慨嘆してばかりもいられない。読者の建設的ご批判を切望するものである。